

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-13

納紗布日誌

松浦, 武四郎

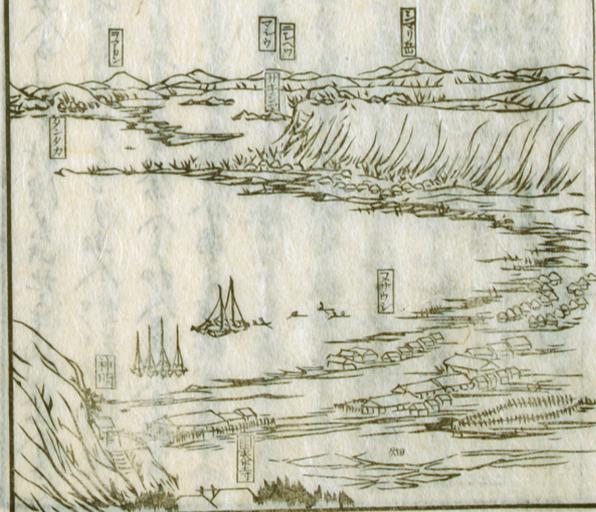
(発行年 / Year)

1860

納紗布日誌

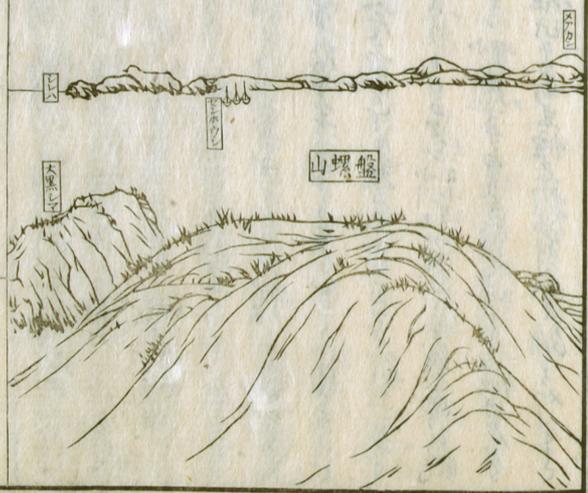
全

靖蜒洲盡處孤島別
乾坤天度雖稍異可
以充北藩環海魚鰕
富連山草木蕃竭此
山海利安地足蕪敷
毛人頗強健茅屋自
成村祿體掉小艇不
敢畏寒喧撫育得其
法可以補兵屯惜哉
季世弊常無一定論



賈堅圖其利空勞志
士魂惟我有所見建
策陳迂言非速改舊
習全島已保存偏恐
千歲後或為鯨鯢吞
丙辰初巡視
有感作

內山良隆



內山良隆

ハラツキニシテアツケレの傍ニモ敵ニ善道のすえ方ありキヤコツトモ
カヤコツコの本の枝を刺キシテ今二圍條の大小ノ成て長七四圍面ノ成
そや弘は多師の枝杉本葉の即の枝杉ヨハ成ノ枝を人の枝杉そそおけ
長しそも是倫は英解のあつるむす又と思ふ

天覽も備りり 考のまほしく 剛中を敵強の者あり 延世臨主人物
侍考也

四月廿日 明後年 針江ニエヒラ 岩城ニたる名屋是バラシンの下り
巴ヤヲチヨツフヨロシヨフ 遊を満るるの義ニアイカツ 岬 不中外の義ニ

注生余我の時 岬より 軍務を考より 弓を射す 亦南より 射し

依はまると 射と射を ツクシヨエ 産あまると 義ニエニカツ 射は是れ

大なる島岬あり 是も 岩城より トウコダン 小川上 沼所と云 我を此の眺

中より 目を向く 方ニ インカルウシ 岬見 岬ありの成 射は 射は 射は

故は 射と 射と 射と キミセシエマ 射は 射は 射は 射は 射は 射は

射は 射は 射は 射は 射は 射は 射は 射は 射は 射は 射は 射は

怒視盤龍の形 實は目を驚き 是ヒリカラタ 後ハ岩城ニ成り

小島 岬ハ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

大島 岬ハ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

方由 依て 早く エラマイ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

岩ニ 身を 竊り 用たり 早く 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

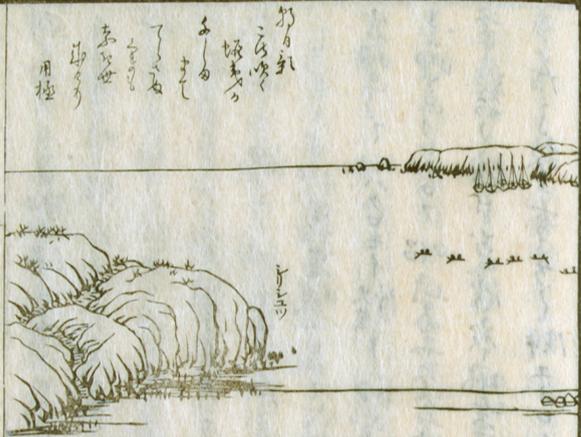
鉄と 人を入 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

ムカイ サカイ マフ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

大岩 故は 早く 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ 岬ニ 岩城ニ

おのれ
こゝろ
城まの
ふし
てし
てし
まの
まの
まの
用極



新給一落を素よりありと新給一を
根より金に見たりと根の
土を陽法に大相を得故に葱の
虫隔く故に彼地を洗て故に
な惟要入るより流るる全すのまに
地故くもさるて彼地を洗て
海にまう附てもは海を身根をさ
子知るとも水過さホヌマツ川
毛のき水藻も故もマロ



さてクニヤタウシ海は葱取多き地
故も是少人の喉料のわあアイハカマ
言きキト一のりは遠くもは皆金
坑の何塩跡より山をさすも月
味し味金の濃れも界の山方
竹森を照り窓も空のやまな
相なり西人山蒜夥しく生たり是當
ニ其土地金銀鑽有モノ証ナリ野作
説し盡て金丸方と地と葱の於能く
出るも也考一佐渡の世に河内

水約多く考る

水約多く考る故に又是よりホロク岬の上をこりニムウレ

岬の上をこりニムウレ

二島

物抄

新編 日本書紀

卷之六

二馬コバケイモシリ海土ア用カバケケモシ被シテの義あり

物言をうぬや凡縁の度吹倒るる牛多又鹿捕獲のり味清二馬

顯引をかくまの者実を親く少く二馬の背をみるゝと云ふ思ふ

云務少のまじり所の原を分けたり初如神代の中と一と云ふ

トリトエウレ破椽もろふおあまきと云ふまふ今ほ留方事と樹木二

てテコトエ、イソ岩芳穂をぬきあがらなくして又二夜は岩の取

まゝと云ふ依りもつり又サウレエナラと是則ハ

ノツレヤブ^サ一^サ時不東海突出^サと岩採海中二里餘^サ出^サ枝^サ白波是

激^サまゝと云ふ布をぬきと云ふ上を採りて承て是火のけ病の時

小堂を^サ二クナレリ^サ向^サを^サ務^サの^サ方^サ又^サ横^サり^サ巽^サの方^サ又^サ海^サ正^サ

ヲトキ^サ岩^サ破^サの^サ一^サ^サモシ^サリ^サ用^サは^サま^サく^ササ^サキ^サ口^サ用^サ四

ま^サて^ササ^サカ^サカ^サユ^サウル^サ用^サは^サま^サく^サハ^サル^サモシ^サリ^サ用^サは^サま^サく^サ用^サは^サま^サく^サ用^サは^サま^サく

手^サを^サテ^サ余^サイ^サタ^サレ^サイ^サツ^サ用^サは^サま^サく^ササ^サキ^サ海^サ横^サ水^サ船^サ破^サは^サま^サく^サは^サま^サく

岬^サニ^サリ^サけ^サ湯^サ門^サを^サク^サナ^サレ^サリ^サ下^サロ^サフ^サモ^サロ^サ行^サの^サ舟^サを^サま^サく^ササ^サキ^サ海^サ横^サ水^サ船^サ破^サは^サま^サく

又^サイ^サシ^サヤ^サウ^サ用^サは^サま^サく^サ左^サ止^サ磯^サの^サ交^サ鳥^サを^サ採^サり^サま^サく^ササ^サキ^サ海^サ横^サ水^サ船^サ破^サは^サま^サく

由^サナ^サリ^サ用^サは^サま^サく^サシ^サボ^サツ^サ用^サは^サま^サく^サシ^サベ^サラ^サツ^サの^サ柱^サを^サま^サく^ササ^サキ^サ海^サ横^サ水^サ船^サ破^サは^サま^サく

船^サ身^サ用^サは^サま^サく^サタ^サラ^サク^サ用^サは^サま^サく^サ本^サ名^サマ^サク^サイ^サあ^サと^サ是^サ酒^サ清^サと^サ云^サふ

の^サ一^サ高^サ中^サ岩^サ破^サ滑^サと^サ云^サふ^サ故^サと^サ云^サふ^サ共^サ樹^サ木^サと^サ云^サふ

レ^サコ^サタン^サ用^サは^サま^サく^サ極^サと^サ云^サふ^サ是^サ是^サの^サ果^サ多^サれ^サと^サ云^サふ^サ海^サ横^サ水^サ船^サ破^サは^サま^サく

の^サ船^サあ^サく^サは^サ通^サり^サ極^サ本^サと^サ云^サふ^サ危^サ地^サと^サ云^サふ^サ同^サは^サ小^サと^サ云^サふ^サ船^サ身^サ用^サは^サま^サく

新編 日本書紀

卷之六

飯と炊き喰と、潮まき、咽喉湯きと、水と、其二用と、
 沿周凡成り、よほよみキニツカシベニツカ
 へツハ、飯中、又、沼中、堤、地、餘、小、貝、ち、を、夜、二、面、目、を、弄、り、

明中、ま、ま、夜、の、神、り、ろ、の、酒、く、く、や、も、夜、の、く、く、あ、せ、ね、く
 中、く、ま、ま、神、り、ろ、の、甲、く、ま、ま、れ、く、く、あ、せ、ね、く、く、あ、せ、ね、く、

女、曾、小、風、津、飯、を、炊、へ、く、く、あ、せ、ね、く、く、あ、せ、ね、く、
 今、仍、自、炊、を、せ、り、く、く、あ、せ、ね、く、く、あ、せ、ね、く、

男子、ウ、レ、小、は、不、考、人、家、有、時、賣、單、海、洗、り、由、く、ま、ま、れ、く、
 け、ま、ま、後、深、き、故、く、衣、彼、身、の、附、き、甚、歩、行、窓、ま、り、故、く、時、飲、を、葉、を、枝、を、腹、
 換、葉、を、腹、を、後、ひ、く、小、毛、を、衣、と、拂、ひ、衣、後、方、の、附、き、百、反、ま、り、敷、を、採、

貞也(雙面)

維筆維苦嘗舌嘗來
 乃獲異卉味美於回
 衆救饑餓其功偉哉
 楮鞭仁草汲何人斯

覽江川田野題

敬齋精義書(卷末)



内

〇七

全。已時歷納紗布岬。東踔四里。抵水晶島。重霧四塞。咫尺不
辯。乃鎖船巖間登岸。檢時規僅過午。

初六日用寅卯針揚帆。雲霧忽駁忽合。變態無極。抵悉勃通
島之登根別巖。崖土有赤有白有紺有黑。斑爛作纈紋。差千
出大洋。南風大作。船傾側簸蕩。衆昏眩暈。啞喊狼藉。倚舷而
望。四面浩淼。無巖嶼可泊。萍飄蓬轉。一任其所之。忽見一島
千艮位。轉舵赴之。巨巖盤薄于頽波怒濤之間。傍多礁石。一
誤則船粉碎矣。衆相顧失色。入夜風少定。展帆東馳。初更達
多羅久島。繫舟登岸。濕霧如雨。燭火屢滅。乃燒枯枝敗葉取
明。

初七日平且與松岡德松村精。巡視島中。無大樹。岸皆巉岨。
往々帶青綠色。光瑩如孔雀石然。

初八日暴雨驟至。避于巖穴。寒甚。御綿衣。舟中水且盡。派人
覓泉。不得。乃掘地出水。煤色。以巾漉之。有臭氣。

初九日微雨。鏡海。櫛長丈餘。未及收。飛濤大至。忽盪去。可惜。
際昏。德獲鷺一隻而歸。

初十日颶風夜半收。怒織月在空。明日天氣可知。

十一日開齋解纜。南風側帆東踔。望洋面。白如雪。俄頃潮
米。其鳴如雷。其疾如馬。狂吼奔騰。裹駕蓬脊。蓬雷如瀑。船傾
欲將危。舟人惶息失措。德曰潮急如此。請一還于多羅久候。

順風。余曰。何日無潮。且海路既過半。今而回帆。是廢前功也。舟人奮激。竭死力。劣能過之。日晡始見志古草島之佐喜宇。遠別嶼。樹木可辨。既到嶼口。濤高不可得通。傍島南入阿摩麻比灣。拋錨。岸石磊礫。皆欲動。諦視則水豹群聚也。其啼如赤子。又多鱗。手獲百餘尾。

十二日出灣。過麻宇多。阿比羅烏度流諸岬。此間平岡漫嶺。無大樹。抵佐喜宇遠別。島形一變。峯巒突起。瀕海怪石攢簇。或蹲如虎。或睨如獅子。或聳如豺狼。或如人立。或如渴牛怒。或如鶴啄鶻。落龜伏蛇盤。千狀萬態。不能盡述。轉入敏寧志豫灣。一山皆鳳尾松。懸泉數條。隱見樹間。白光閃閃。奪人

目。鷺鵬海鷺。皆見。人驚起。回翔空中。不知幾千數。歷遠羅勒。遍泊阿奈麻力灣。

十二日弗旦。傍島北。歷麻多古草。夷言冬村也。抵射古草。夷言夏村也。舍舟登陸。有草類燈心艸。細毳密布。如鋪青氈。多古墳。酒祭之。文化中有太郎者。以勇力畏服土人。自立為首長。更有并吞根室惡消之意。惡消首長伊古登比。有膽畧。欲除之。乘小舟來直過。其廬太郎素相識。具酒饗之。伊古登比始入室。挿匕首于簷端。酒既酣。急起執匕首刺之。斃云。十四日平明巡視。有聲震地。如大砲連發。衆驚以為洋船進。舉令人見之。山崖崩數十丈矣。大樹皆合抱。撐天蔽日。其下

敗葉重疊。行葉上不知穴隆。一失足幾墜深谷。饒狐與他種
異。面短身羸。其毛或黃赤或黑白。有二色者。有三色者。純
黑者。映日為金色。尤美。夷人與滿洲人交易。以此為上貨。王
士慎池北偶談云。玄狐惟王侯以上始得服。則其貴可知矣。
十五日發射古覃。歷度加理宇多。知呂毛志利。惠麻菜古通
計。久伊保。泊古覃。計志無。是為島南邊。較北邊覺少暖。是夜
有火焚。起海中。散作數百星。如近如遠。至曉滅。或云大魚
目。或云鹽精。未知孰是。

十六日歷登伊度古麻。比還。佐喜宇遠。別舉。周迴凡三十
四里。大小二十四灣。皆可泊。可漁。事既竣。約明日回帆。

十七日揚帆向西。回視志姑覃。既沒高濤間。

十八日早船在多羅久島東北五里。便風駕駛。儼甚。

十九日閉霽。觀日出。海水俱紅。未時風恬波平。船膠滯不前。
黃昏。便風復作。挂帆三分西馳。

廿日船為潮所流。十里許。差午風轉東南。舟人忽報曰。距根
室僅三里矣。舉舟攏拊。食頃入港。此役海路險惡。將葬魚腹
者屢矣。而同行十數人。無一損失。豈非天幸乎。歷程往還凡
百四里。歷日凡十有六。

隨境記實似易而難。架空弄筆似難而易。何也。弄筆者
可以逞巧。而記實者動輒流平。凡況他人所記。我從而

譯之。華、顧原文。一字不可移動。則其難可知。而此
篇行文流暢。絕無拘束態。可謂能手矣。五代史四夷
傳有錄客話以成一篇好文章者。此篇或庶幾焉。

癸亥人日川田剛安評

280
世評

君位涼才廣名較之
高秋之冠庭柯昂然
試問南苑何如風濤
正安月 廣作 正志安



